

言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析

—JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて—

塩澤真季・石司えり・島田徳子

〔キーワード〕 言語能力の熟達度、CEFR 共通参照レベル、レベルごとの特徴、Can-do の要素、Can-do の構造

〔要 旨〕

国際交流基金（以下、基金）では JF 日本語教育スタンダード開発の一環で、日本語能力のフレームワークとして「能力記述文データ検索ウェブサイト」を開発し、コース設計や学習評価など日本語教育の実践を支援したいと考えている。本サイトでは、CEFR が提供する 493 の例示的能力記述文と、日本語教育現場で活用しやすい例示的能力記述文として基金が作成する JF Can-do を提供する。本稿では、基金が JF Can-do を新しく作成するためのガイドラインを検討するために、CEFR 共通参照レベルと各レベルの例示的能力記述文の特徴を分析した結果について述べる。CEFR の例示的能力記述文を 4 つの要素〔条件〕〔話題・場面〕〔対象〕〔行動〕に分解して分析した結果、各レベルの特徴やレベル間の変化を把握することができた。

1. はじめに

グローバル化が進み、人の移動や多言語化・多文化化が進む国際社会において、コミュニケーションを重視した言語学習・教育の必要性が高まっている。それに応えるためには、実際の言語使用をふまえ、言語能力の熟達段階に応じて、言語学習及び教育をデザイン・実施し、学習・教育効果を実証的に示すことが必要である。欧州評議会による「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」（以下、CEFR）は、欧州で共有されることを目指した言語教育・学習の汎言語的なフレームワークで、言語能力の熟達度を示す共通参照レベルと、6 つの各レベルで「実際の言語使用場面で何ができるか（Can-do）」を記述した 493 の例示的能力記述文（以下、CEFR Can-do）を提供している。

これまでの日本語教育では、日本語能力試験の 1 級・2 級・3 級・4 級の認定基準や出題基準、「話す力」を測定する ACTFL-OPI（ACTFL Oral Proficiency Interview）の判定尺度と基準などが、日本語能力の熟達度を示すフレームワークとして機能してきた。一方、Can-do という考え方は、日本国内の言語教育の現場においても、各学年や学期ごとの目標の記述、自己評価や教師による評価のために使うチェックリストの作成、タスク達成評価の基準作成などのた

めに取り入れられている (青木2006、島田他2003、島田他2007、長沼2008)。実用英語技能検定や日本語能力試験など大規模テストの得点解釈のための Can-do 開発も行われている (大隅他2006、野口他2006、野口他2007、長沼他2007、財団法人日本英語検定協会2009)。テストの得点解釈のための Can-do は、合格者が自己評価で「自分はこの項目に書かれたことができる自信がある」と答えたものを統計的な手法を使って分析し作成され、テスト結果から「実際の言語使用場面で何が出来るか」を受験者に Can-do でわかりやすく示すことを目指している。しかし、長沼 (2005) が指摘するように、これまで共有されてきた日本語能力の熟達度を示すフレームワークや、Can-do の活用事例は、CEFR のように言語能力の熟達度を包括的に記述し社会的に共有を目指したものではない。また、言語能力の熟達段階に応じて、Can-do を位置づけたものではない。

現在、国際交流基金 (以下、基金) は、日本語教育・学習・評価を考えるための基盤として JF 日本語教育スタンダード (以下、JF スタンダード) を開発中である。なかでも、Can-do をデータベース化した「みんなの「Can-do」サイト」(以下、「Can-do」サイト) の開発は、日本語能力のフレームワークを構築し、社会的に共有しようとする試みである。「Can-do」サイトは日本語教育関係者 (コース/カリキュラム/シラバスデザイナー、コーディネーター、教材開発者、試験開発者、教師など) を利用者として想定し、日本語教育における課題遂行のためのコミュニケーション言語能力の育成を目指した教育実践の支援ツールである。Can-do をデータベース化して教育現場に例示することにより、コースデザイン、授業設計、教材開発、学習評価、コース評価、試験開発など、言語能力の熟達段階に応じて言語学習及び教育をデザイン・実施・評価することを支援する。

「Can-do」サイトでは、CEFR Can-do と基金が作成した JF Can-do を提供する。共通参照レベルの各レベルにそった493の CEFR Can-do は、コミュニケーション言語活動・方略・コミュニケーション言語能力に分類され、中でもコミュニケーション言語活動の Can-do (以下、活動 Can-do) が全体の75%を占めることが特徴的である。しかし、CEFR の活動 Can-do は汎言語的で抽象度が高いため、基金はより日本語教育の現場で使いやすい JF Can-do を作成する。JF Can-do は、CEFR 共通参照レベルに基づいて日本語での言語活動の例を記述したものである。

基金が JF Can-do を作成するためには、共通参照レベルの各レベルの特徴を十分に理解しなければならない。そこで筆者らは、JF Can-do として言語活動例を示すために CEFR の活動 Can-do を対象に、各レベルの Can-do の記述の特徴やレベル間の記述の変化について分析した。本稿ではその分析結果を報告し、それを踏まえた Can-do 作成のためのガイドライン策定の方角について述べる。

2. 先行研究

2.1 CEFR 共通参照レベルの概要

CEFR 共通参照レベルや CEFR Can-do は「言語能力の熟達度 (language proficiency) に応じて言語使用者／学習者がどのような課題を遂行することができるかを描いたもの」(国際交流基金 2009 : 43) であり、学習の成果としてどのような言語活動ができるようになるかを記述したものである (Little 2006 : 169)。したがって、CEFR Can-do はその記述内容の難易度に応じて尺度化されたものであり、言語学習や第二言語習得の順序を示したものではない (North 2007 : 8)。

CEFR 共通参照レベルは多くの場合、下から〈A1、A2、B1、B2、C1、C2〉の6レベル (Council of Europe 2008 : 23) で示されるが、A2とB1、B1とB2、B2とC1の間にひとつずつレベルを追加した9レベルを用いることもある¹。6レベルで提示すると、各レベルの差異が明確にわかるため、既存の試験や資格との関連付けや自己評価がより正確にできる利点がある (North 2002、2007)。一方、9レベルで提示するとレベル間の幅が6レベルに比べ狭くなるため、学習者の能力の伸びがわかりやすくなり、各教育現場での評価活動に適している (North 2002、2007)。つまり、2つのレベルの分け方があることで、目的に応じてどちらのレベル分けで言語能力の熟達度を判断するのか、利用者は柔軟に選択することが可能となっている。

CEFR の第3章では、9つの各レベルに位置づけられたさまざまな CEFR Can-do の特徴がまとめられている。表1は、レベルが上がるごとに見られる新たな特徴の概要である。

表1 CEFR 共通参照レベル「レベル別概要」まとめ (9レベル)

| | | |
|-----|----------------------------------|--|
| C2 | Mastery | CEFR で記述されている最も高いレベルであり、言語使用の正確さ、適切さ、容易さという側面からも非常に熟達度が高い。 |
| C1 | Effective Operational Efficiency | 幅広く言語を使用し、流暢に、自然にコミュニケーションをすることができる。また、しっかりとした構成を持った談話を産出することができる。 |
| B2+ | Strong Vantage | 他の話し手に配慮しながら議論の発展に寄与するなど、会話の管理に関する能力が顕著に現れる。また、一貫性や結束性を持った活動や、交渉ができるようになる。 |
| B2 | Vantage | 意見の根拠などを提示しながら、効果的に論述することができる。また、会話の際にさまざまな方略を活用できるなど、談話の中で自分の立場を維持する以上のことができる。さらに、自らの間違いを自主的に修正するなど、言語に対する意識が高まる。 |
| B1+ | Strong Threshold | 交換される情報の量に焦点を当てた Can-do が多くある。その内容や正確さには限界があるものの、一定のまとまった情報を伝えることができる。 |
| B1 | Threshold | 会話を維持し、さまざまな文脈の中で自分の言いたいことを相手に分かってもらえるように話せる。また、日常生活で遭遇するような問題に柔軟に対処できる。 |
| A2+ | Strong Waystage | 援助を必要とし、ある程度の制限はあるが、積極的に会話に参加したり、一人で話し続けたりすることができる。 |
| A2 | Waystage | 社会的な機能を担ったり、国内や海外の生活の中で遭遇するような課題を達成することができる。 |
| A1 | Breakthrough | 暗記された表現の再生だけでなく、言語を自ら生み出して使用できる最も低いレベル。自分自身のことについて、簡単な会話ができる。 |

(Council of Europe 2008 : 34-36をもとに筆者らが作成)

この表を見ると、たとえばA1では簡単な会話しかできなかったのが、A2では生活の中で遭遇する課題を達成でき、A2+では会話に参加したり一人で話し続けたりと長い発話ができるようになる。このようにレベルが上がるにつれて「できる」ことが増えたり、難易度の高い課題を遂行することができるようになることが読み取れ、各レベルの大まかな特徴をとらえることができる (Council of Europe 2008 : 34)。さらに、CEFRの第3章には各レベルの差異を説明するため、たとえばA2では「人に挨拶する、機嫌・調子を聞いたり、近況に反応する、社会的な短いやりとりを交わす」(Council of Europe 2008 : 34) など、具体的な言語活動の例も示されている。このような各レベルの大まかな特徴とそのレベルで典型的な言語活動の例を合わせて示すことによって、利用者のCEFR共通参照レベルへの理解を深めようとしている。このような「レベル別概要」は、それぞれの特徴を理解し、隣接するレベル同士を区別するためには非常に有用であると考えられる。

しかし、各現場の教育実践者が具体的な現場のニーズに合わせたCan-doを新たに作成しようと考えたとき、この「レベル別概要」のみを拠りどころとするのは難しい。なぜならば、実際の教育現場で必要となる具体的な言語活動が「レベル別概要」で具体例として挙げられていない場合、ある活動を特定のレベルと判断することが難しいからだ。2007年に欧州評議会によって開催されたフォーラムで、CEFR共通参照レベルをよりよく理解するためのサンプルやツールの開発に対する要望が強かった (Goullier 2007 : 10) ことも、利用者が実際の教育現場でCan-doを活用するためにはより詳細な参考情報が必要であることを示唆していると言えるだろう。

2.2 CEFR Can-do 検証作業からの知見

CEFR共通参照レベルをより詳細に分析する方法として、North (2000) がCEFR Can-doの尺度化とレベル化の妥当性を検証した作業を参考にすることができる。この作業では各レベルの記述内容の一貫性を確認するため、Can-doを分解して各レベルに共通すると思われる〔行動〕〔トピック・場面〕〔制約条件〕の3つの「要素 (elements)」を抽出し、一覧表にまとめている (North 2000 : 292-293)。Northはこれ以外にも複数の観点から一覧表を作成し、同じレベルでは同様な記述がくり返し出現することを確認している (North 2000 : 285-309)。表2は、A2レベルのCan-doを上記の3要素に分解した結果である。

表2 Can-do の要素の一覧表：A2 レベル

| レベル (Level) | | 活動 (Action) | トピック/場面 (Topic/Setting) | 制約条件 (Limitation) |
|-------------|---------------|---------------------------------------|-------------------------|--|
| A2+ | Waystage Plus | 短い会話に参加できる | 毎日の生活でよくあること | 何かを述べるために助けを求められなければならない 伝えたい内容を制限しなければならない |
| | | 自分の言いたいことを相手に理解させられる、考えや情報を交換できる | 予測可能な日常の状況での身近な話題 | もし、繰り返しや言い直しを求められることができれば |
| A2 | Waystage | 非常に短い社会的なやり取りには対応できる | 簡単で、日常的で、直接的な情報交換 | 自分で会話を維持できることはほとんどないが、相手の方が面倒がらねば、理解してもらえる |
| | | 公共交通機関についての簡単な情報を得ることができる | 具体的で単純なニーズ | 助けを与えられたら |
| | | 情報がある程度まで交換できる | 基本的なコミュニケーション上のニーズ | |
| | | 単純な、よくある状況の中で、簡単な語句を使って必要なものを得ることができる | | |

(North 2000 : 292-293をもとに筆者らが作成。和訳は Council of Europe (2008) を参照した)

North (2000 : 295) は、この一覧には空白もあり、言語能力の熟達度の全貌を記述したものではないと指摘しながらも、これを参照することで各レベルの特徴を概観することができる主張する。表2では、Can-do の内容が CEFR の第3章の概要に比べ簡潔に述べられているだけでなく、〔行動 (Action)〕〔トピック・場面 (Topic/Setting)〕〔制約条件 (Limitation)〕の分類で、各レベルの特徴が分析的に整理され、読み手にとってわかりやすい形で表示されていると言えるだろう。たとえば、A2 では短い社会的なやり取りをしたり、公共交通機関についての簡単な情報を得ることができるが、扱えるトピックは日常的な話題や具体的なニーズに関することであり、自分で会話が維持できない、理解を得るためには相手の努力が必要、という制約条件がある。一方、A2+ では短い会話への参加や、考えや情報の交換が可能となり、トピックは日常生活に関する身近な事柄で、繰り返しや言い直しが必要という制約条件がある (North 2000 : 294)。

しかし、この一覧表に示された要素別の記述は一文が長く、各レベルの特徴を把握しにくい。分解後の記述を短くするためには、〔行動〕〔トピック・場面〕〔制約条件〕に新たな要素を加えて分析することを、検討する必要がある。また、North によるこの作業は CEFR Can-do の開発途中で実施されたものであり、分析対象は CEFR Can-do の一部、主に「Spoken Interaction (話しことばのやりとり)」に関する Can-do に限られている。CEFR 共通参照レベルをより深く理解するためには、①CEFR Can-do をより多くの要素に分解して各レベル間の特徴をより明確に示すこと、②「話しことばのやりとり」以外の Can-do も分析対象とし Can-do の分析対象範囲を広げること、が必要である。

2.3 本研究の目的

本研究の目的は、Can-do 作成のためのガイドライン策定のために、CEFR の共通参照レベルと各レベルの Can-do の特徴やレベル間の記述の差異を明確にとらえることである。本研究で CEFR Can-do を要素という観点から詳細に分析し、A1 から C2 のレベルイメージを明らかにすることにより、今後 CEFR 共通参照レベルに関連づいた、日本語独自の Can-do を作ることができると思われる。

3. 方法

3.1 分析の方法

分析の対象としたのは、Council of Europe (2008) で提供される CEFR Can-do の日本語訳²のうち、活動 Can-do と分類できる365個である。「言語活動」と「要素」を分析の観点とし、CEFR 共通参照レベルのそれぞれのレベルでどのような記述の特徴があるのか、隣接レベルとの差が顕著である表現を洗い出した。ここでいう「言語活動」とは、CEFR Can-do で記述されるコミュニケーション言語活動の分類項目でもある、〔受容〕〔産出〕〔やりとり〕を指す。一方、「要素」については、2.2の North (2000) の分析結果の〔行動〕〔トピック・場面〕〔制約条件〕の3要素に加え、1文中の記述の割合が長かった〔行動〕を、〔行動〕と〔対象〕に分けた。〔対象〕とは、受容的活動におけるインプットや産出・やりとりにおけるアウトプットの例とする。したがって、本研究では Can-do を〔行動〕〔話題・場面〕〔対象〕〔(制約)条件〕の4の要素に分解して分析することとする。なお、各教育現場で学習者の伸びをとらえ、学習者自らがその伸びを実感できるようにするためには、レベル間の幅が狭いほうがよいと考え、9レベルでの分析を試みた。

3.2 分析の手順

分析の各手順は以下のとおりである。なお、①②は、③と④を行うために必要な前作業と位置付けられる。

① レベル別キーワードを選定する（形態素分析）

小木曾ほか (2007) の開発した形態素解析ツール「茶まめ」³ を利用し、CEFR Can-do の記述をレベル別に分析した。ここでいうレベルとは、CEFR 共通参照レベル〈A1、A2、B1、B2、C1、C2〉の6レベルである⁴。レベル別の形態素分析結果で名詞、形容詞、形状詞（形容動詞の語幹部分）、副詞とタグ付けされる語を出現度数が高い順に並べ、各レベルで30%前後を占める語を特定した。これをレベル別キーワードと呼ぶ。

② レベル別キーワードから、「Can-do 記述の特徴」を抜き出す

次に、レベル別キーワードが、Can-do の記述の中でどのような表現と結びついているか

を把握するため、語句や文のまとまりで抜き出した。この、レベル別キーワードに付帯する語句や文のまとまりを「Can-do 記述の特徴」と呼ぶ。この作業は、CEFR 共通参照レベルをさらに分割した9つのレベル別に行った。

③ 「Can-do 記述の特徴」を要素別に分類する

North (2000) を参考に、ひとつの Can-do を〔条件〕〔話題・場面〕〔対象〕〔行動〕の4要素に分解することを決定した。たとえば、<B1：受容>の「もし、話が標準語で、発音もはっきりとしていれば、自分の周りでの長い議論の要点を普通に理解できる」という Can-do を、4要素に分解すると次のようになる。

- 〔条件〕 → もし、話が標準語で、発音もはっきりとしていれば
- 〔話題・場面〕 → 自分の周りでの
- 〔対象〕 → 長い議論の要点を
- 〔行動〕 → 普通に理解できる

次に、分類作業中の混乱を最小限に抑えるため各要素の定義を明確にし、表3のようにまとめた。表3には上記で分解した Can-do の例を含め、要素別に分類された「Can-do 記述の特徴」も例示した。

表3 Can-do の要素⁵

| 要素 | 定義 | 「Can-do 記述の特徴」の例 |
|------------------------|----------------------------|--|
| 条件 condition | このような条件が整っていれば | <ul style="list-style-type: none"> ・もし、話が標準語で、発音もはっきりしていれば ・はっきりとゆっくりと話してもらえれば ・何らかの助け舟を出してくれる人がいるならば |
| 話題／場面 topic/setting | このような話題に関して このような場面・状況で | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の周りでの ・身近で個人的に関心のある話題について ・当該言語圏の旅行中に |
| 対象 object | この程度のもの（テキストタイプ・素材）を | <ul style="list-style-type: none"> ・長い議論の要点 ・簡単なプレゼンテーション ・ラジオやテレビ番組の要点 |
| 活動 action | この程度××することができる | <ul style="list-style-type: none"> ・普通に理解できる ・簡単な字句を並べて述べるすることができる ・細かいところまで理解できる |

ここで確定した要素とその定義に従って、②の作業の成果である「Can-do 記述の特徴」を元の Can-do のレベルごと、言語活動ごとに4要素に分類した。

④ 「Can-do 記述の特徴」をレベル別・要素別・言語活動別にわかりやすくまとめる

各レベルで要素別に分類した成果を、一覧表にまとめた。「Can-do 記述の特徴」が重複する場合は、代表的なもののみを抜き出すこととした。

4. 結果

4.1 分析結果

レベル別キーワード選定にあたっては、すべてのレベルで最も多く出現した「事」を除いた出現合計数の30%前後を目安とし、その結果、表4 レベル別キーワード一覧のとおりとなった。

表4 レベル別キーワード一覧

| レベル | A1 | A2 | B1 | B2 | C1 | C2 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| レベル別キーワード | 理解 | 簡単 | 自分 | 理解 | 複雑 | 複雑 |
| | 簡単 | 理解 | 理解 | 自分 | 理解 | 表現 |
| | 自分 | 日常 | 話題 | 議論 | 表現 | 様 |
| | 表現 | 短い | はっきり | 関連 | 話題 | 無い |
| | ゆっくり | 自分 | 情報 | 話題 | 詳細 | 理解 |
| | 短い | 情報 | 簡単 | 詳細 | 自分 | 可成 |
| | 指示 | はっきり | 説明 | 情報 | 専門 | 構造 |
| | 質問 | 質問 | 日常 | 説明 | 展開 | 専門 |
| | 人 | 必要 | 身近 | 専門 | 関連 | 適切 |
| | | 身近 | 問題 | はっきり | 長い | 母語 |
| | | 直接 | 意見 | 意見 | 点 | 明瞭 |
| | | 話題 | 短い | 視点 | 無い | 話者 |
| | | 仕事 | 発音 | 点 | 自然 | |
| | | | 相手 | 複雑 | 場合 | |
| | | | 話 | 分野 | 抽象 | |
| | | | | 母語 | 明瞭 | |
| | | | | 様 | | |
| | | | 話者 | | | |
| 割合 | 33.1% | 29.6% | 28.2% | 21.6% | 31.6% | 26.3% |

これらのレベル別キーワードをもとに、分析方法②～④の作業を行い、レベルごとに、要素（〔条件〕〔話題・場面〕〔対象〕〔行動〕）別、言語活動（〔受容〕〔産出〕〔やりとり〕）別に、記述の特徴を見た。表5 「Can-doのレベル別特徴一覧」（pp. 32-33）は分析結果をまとめたものである。次節で、分析結果について詳しく述べることとする。

4.2 レベル別分析

4.2.1 レベル別の大まかな特徴

まず、9レベルの大まかな特徴を、表5「Can-doのレベル別特徴一覧」より、簡潔に述べる。

▶ A1では、発話が直接自分に向けられて、非常にゆっくりと注意深く発音してもらえれば、自分や身近な話題について、簡単な句や文を使った非常に短い発話やテキストを理解できる。

▶ A2では、ゆっくりとはっきりと話されれば、身近な話題について予測可能な特定の情報を抜き出すことや、簡単なやりとりができる。

・ A2.1では、重要な点をくり返してもらえらば、直接的なニーズに関わる、仕事を含む日常的で簡単な話題について、簡単な句や文を連ねてやりとりができる。

・ A2.2では、聞いたり読んだりする際には簡単なことばで表現されればという制約条件があるが、生活や自分の仕事、専門分野に関連する事柄について短く述べたり、感情を伝えたり情報を交換するなど簡単なやりとりができる。

▶ B1では、標準語で発音もはっきりしていれば、自分の専門分野や興味のあるテーマに関して情報を得たり、簡単な接続詞でつなげた結束性のあるテキストで情報や自分の意見を伝えることができる。

・ B1.1では、個人的関心のある、または日常生活に関する話題が扱える。

・ B1.2では、日常や普段の仕事上の話題のほか、抽象的・文化的な話題に関して議論の大筋を理解したり、情報を交換したりすることができる。

▶ B2では、自分の関心や専門分野に関する幅広い話題について、内容をすぐに把握したり、長い会話に参加できる。

・ B2.1では、抽象的な話題でも具体的な話題でも一般的なもののほとんどに対応でき、関連情報や論拠を述べ、自分の意見を説明できる。

・ B2.2では、一般的、学問的、職業上、余暇に関する幅広い話題について、複雑な議論の流れを理解したり、要点の適切な強調や説得力のある言葉遣いができる。

▶ C1では、専門外の抽象的で複雑な話題に関しても、助けをほとんど必要とせず、要点を押しえながら流暢に自然に話したり、明確な構成の文章を書いたりすることができる。

▶ C2では、専門外の複雑な議論を理解し、口語表現や慣用表現も使いこなして細かいニュアンスも的確に伝えるなど、自由に会話ができる。

表5 Can-do のレベル別特徴一覧⁶

| 要素 | A1 | A2 | B1 | |
|-------|------|---|--|--|
| 条件 | 受容 | 非常にゆっくりと注意深く発音してもらえれば 直接自分に向けられた | ゆっくりとはっきりと話されれば 簡単な言葉で表現されていれば <A2.2> はっきりとゆっくりとした発音ならば <A2.2> | 標準的なことばで、話もはっきりしていれば 話し方が比較的ゆっくりとはっきりとしていれば <B1.1> 明瞭で標準的に話されたものであれば <B1.1> 大体聞きなれた話し方で発音もはっきりしていれば <B1.2> |
| | 産出 | 短い、練習済みの基本的なものならば <A2.1> くり返し言ってもらった場合 <A2.1> | | 相手の話すスピードが遅い場合には [理解が難しい] |
| | やりとり | 直接自分に話ぐむけられれば はっきりと、ゆっくりと、くり返してもらえらば 相手がこちらの状況を理解してくれれば | 発話がはっきりとゆっくりとしていたら <A2.1> 必要な場合に重要な点をくり返してもらえらば <A2.1> 話し手の方が面倒がらねば <A2.1> はっきりと標準的なものであれば <A2.2> 必要に応じて要点をくり返してもらえらば <A2.2> | [日常会話の中で] 自分に向けられたはっきりと発音された話であれば 標準的なことばで、はっきりとした発音であれば 対話の相手に頼る部分が多いもの <B1.1> くり返しや説明を求められることがあるが <B1.2> |
| 話題・場面 | 受容 | 身近な [名前、語、簡単な表現] | 自分の周りの事柄について 予測可能な日常の事柄に関する話題 直接的にニーズのある領域について <A2.1> 非常によく用いられる、日常的あるいは仕事関連の言葉で書かれた <A2.2> 具体的な事柄 <A2.2> | 自分の専門分野や興味に関連のあるテーマについて あまり日常では起きない状況に ごく身近な話題 <B1.1> 日常や普段の仕事上の話題 <B1.2> |
| | 産出 | 自分について 人物や場所について | 予測可能で身近な内容の話題 身近な話題について <A2.1> 家族、生活環境、学歴、現在または最近の仕事について <A2.1> 自分の毎日の生活に直接関係ある話題 <A2.2> 計画、準備、習慣、日々の仕事、過去の行動や個人の経験など <A2.2> | 自分の関心のあるさまざまな話題 自分の専門でよく知っている話題 日常的な事実について <B1.1> 自分の専門範囲の日常的/非日常的な話題 <B1.2> |
| | やりとり | 自分自身や他人に関して 簡単な日常の 具体的に単純なニーズに関する話題 | 直接必要な分野の事柄について 日常の簡単な話題について <A2.1> 興味のある課題に関して <A2.2> 習慣や日常の仕事に関して <A2.2> 自分の専門分野に関連した <A2.2> | 自分の専門分野に関連した話題 身近で個人的関心のある事柄 <B1.1> 日常生活に関する話題 <B1.1> 専門分野の身近な日常的/非日常的な話題について <B1.2> 自分の周りで言われていることのほとんど <B1.2> 抽象的、文化的な話題 <B1.2> |
| 対象 | 受容 | 短い簡単なメッセージ、テキスト 身近な名前、単語や基本的な表現 簡単な情報 | 短い、はっきりとした、簡単なメッセージやアナウンス [の要点] 簡潔なテキスト 日常生活で見る看板や掲示 よく使われる語句で書かれた、短い簡単なテキスト <A2.1> 日常の仕事やファックス <A2.2> | はっきりと書かれた簡潔な説明 簡単な短い話 [の要点] <B1.1> 日常の資料 (簡単な新聞記事、ラジオの短いニュースなど) <B1.1> 比較的簡単な内容の録音された素材 <B1.1> 短いテキスト (物語、記事、スピーチ、演説、インタビュー) <B1.2> 録音され、放送された音声素材 [の大部分の情報] <B1.2> |
| | 産出 | 簡単な表現や文 非常に短くよく使う表現 | 短い、練習済みのプレゼンテーション <A2.2> | 簡単な接続詞でつなげた結束性のあるテキスト ある程度の長さの、簡単な記述やプレゼンテーション 極めて短い報告文 <B1.1> 短い、簡単なエッセイ <B1.2> |
| | やりとり | 短い簡単な指示 | 短い、簡単なメモ、伝言、定型文を使ったメモ 簡単な情報 (数、量、値段など) <A2.1> 事実に基づく簡単な情報 <A2.2> 必要な情報 <A2.2> | 簡単に事実に基づく情報 <B1.1> 具体的な情報 <B1.2> 自分の意見を表現する個人的な手紙 <B1.2> 事実に基づく複数の関連情報 <B1.2> |
| 行動 | 受容 | 一文一節ずつ理解することができる | [予測可能な] 特定の情報を抜き出す 内容を大まかに理解できる <A2.1> 具体的なニーズを満たすことが可能な程度に理解できる <A2.2> | 重要な情報を探し出し、理解できる <B1.1> 情報を収集できる <B1.2> [議論の] 大筋を理解できる <B1.2> |
| | 産出 | 簡単な句や文を並べて 簡単な言葉で 短く述べる 事柄を列挙して簡単に 簡単なことばを用いて | 簡単な句や文を並べて <A2.1> 簡単な言葉で <A2.1> 短く述べる <A2.2> 事柄を列挙して簡単に <A2.2> 簡単なことばを用いて <A2.2> | 簡単に述べる へに対する自分の考え、感情や反応を描写しながら述べる [意見、計画、行動について] 短い理由や説明ができる <B1.1> 自分の意見を表現できる <B1.2> |
| | やりとり | 簡単なやり取りができる 簡単な質問をしたり答えたりできる 紹介や基本的な表現ができる | 簡単な表現を使ってやり取りができる <A2.1> 非常に短い社会的なやり取りができる <A2.1> 疑問点を質問することができる <A2.1> 簡単な用を済ますことができる <A2.1> [あまり苦勞しなくても] 簡単なやり取りができる <A2.2> 簡単な日常な課題にうまく対処できる <A2.2> 考えや情報を交換し、質問に答えることができる <A2.2> 自分の感情を表現できる <A2.2> | 自分が重要だと思ふ点を相手に理解させることができる 情報や意見を伝えることができる 自分の信念、意見、賛成、反対を表現することができる <B1.1> 簡単に理由を挙げて説明することができる <B1.1> [情報を] 確認しながら、交換や報告ができる <B1.2> 自分の意見を表明することができる <B1.2> |

言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析

| 要素 | 言語活動 | B 2 | C 1 | C 2 |
|-------|---|--|---------------------------------|--------------------------------|
| 条件 | 受容 | もし難しい箇所を読み返すことができれば | いくつかの非標準的な表現があっても | 母語話者にかなり速いスピードで話されても |
| | | もし話題がごく身近なもので、話の方向性が明示的に示されれば<B2.1> | 構造がはっきりしていない場合、明示的でない場合でも | |
| | | 自分の話し方を全く変えない母語話者との議論に上手に加われないかもしれないが <B2.1> | 耳慣れない話し方場合は時々確認する必要があるが | |
| | | 周回の極端な発音、不適切な談話構成や慣用表現だけが理解を妨げる <B2.2> | | |
| | | 専門用語の理解に辞書を使うことができれば <B2.2> | | |
| | 産出 | 聴衆にも自分にも負担をかけることなく <B2.1> | | 話題について知識のない聴衆に対しても |
| | | | | |
| | | 騒音のある環境でも標準的な話しことばで言われれば | 助け船を出さなくとも | 標準的でない話し方や言い方に慣れれば |
| | | 話し方を全く変えない母語話者との議論に加われないが <B2.1> | 概念的に難しい話題だと[スムーズに話を展開すること]はできない | |
| | | | 時々詳細を確認する必要はあっても | |
| 話題・場面 | 受容 | 幅広い専門的な話について | 専門外の抽象的で複雑な話題 | |
| | | 抽象的な話題でも具体的な話題でも <B2.1> | 社会、専門、学問の分野 | |
| | | 自分の周りで話されていることのほとんどを <B2.1> | グループ討議やディベートでの第三者間の複雑な対話 | |
| | | 技術的な議論であっても <B2.1> | | |
| | | 自分の専門外であっても <B2.2> | | |
| | 産出 | 個人間、社会、学問、職業の世界で通常出会う話題について<B2.2> | | |
| | | 専門分野の非常に専門的な事柄に関して <B2.2> | | |
| | | 自分の関心のある専門分野の多様な話題について | 複雑な話題について | |
| | | 一般的な話題のほとんどについて | | |
| | | | | |
| やりとり | 日常・非日常的な公式の議論に <B2.1> | 抽象的かつ複雑で身近でない話題 | 自分の専門分野を超えた専門家の抽象的な複雑な話題 | |
| | 身近な状況で論じられている非公式の話題 <B2.1> | 自分の専門分野以外の話題 | | |
| | 自分の専門分野に関して <B2.1> | | | |
| | 一般的、学問的、職業上、余暇に関する幅広い話題について<B2.2> | | | |
| | 自分の職業上の役割に関するどのような事柄についても <B2.2> | | | |
| 対象 | 受容 | 内容的にも言語的にもかなり複雑な講義、話 | 幅広い慣用表現や口語体表現のテキスト | 抽象的で構造的に複雑なテキスト |
| | | 幅広い専門的な話題についての情報や記事、レポート[の内容やその重要性] | 相当数の俗語や慣用表現のある映画 | かなり程度の高い口語表現や方言的な慣用表現 |
| | | 長い話や複雑な議論[の流れ] <B2.1> | 長くて複雑なテキスト | 馴染みの薄い専門用語を利用した専門的講義、プレゼンテーション |
| | | [特別の立場や視点を取り上げた]記事やレポート <B2.1> | | あらゆる形式の書きことば |
| | | [自分に興味のある分野に関連した]通信文 <B2.2> | | |
| | 産出 | いろいろなところから集めた情報や議論 <B2.1> | 明瞭かつ詳細な記述やプレゼンテーション | 明瞭で流れるような、複雑なテキスト |
| | | エッセイ、レポート <B2.2> | 的確な構成と展開を持つ描写文や創造的なテキスト | 論理的な構成をもった流れのよいスピーチ |
| | | 明瞭かつ詳細な記述文 <B2.2> | | 複雑なテキスト |
| | | | | |
| | | | | |
| やりとり | [相手の最新情報や観点に言及する]手紙 | 専門家の抽象的な話 | | |
| | 事前に用意されたプレゼンテーション <B2.1> | | | |
| | はっきりした、体系的に展開したプレゼンテーション <B2.1> | | | |
| | 複雑な情報や助言 <B2.2> | | | |
| | 母語話者同士の活発な議論 <B2.2> | | | |
| 行動 | 受容 | 内容や重要度をすぐに把握できる | 中身を詳細に容易に理解できる | 実質的に理解して批判的に解釈できる |
| | | 情報、考え、意見を読み取る <B2.2> | | 難なく理解できる |
| | | 母語話者の会話についていける <B2.2> | | |
| | | 明確に、流暢に、ごく自然に、アナウンスできる | 論点や要点を展開できる | 明瞭ですらすらと流れるように |
| | | いろいろな情報や議論を評価しううえで、書くことができる | 補助事項、理由、関連例を詳しく説明できる | 適切で印象的な文体と理論的な構成を用いて |
| | 産出 | 補足的観点や関連事例を詳細に補足することができる <B2.1> | 明瞭な構成できちんと記述できる | 聴衆の必要性に合わせて柔軟に話を構造化し |
| | | 利点や不利な点を挙げながら <B2.1> | 自然な文体で書くことができる | 自信を持ってはっきりと複雑な内容を口頭発表をできる |
| | | 適切に要点を強調し、重要な関連のある補足事項を取り上げて<B2.2> | | |
| | | 当該ジャンルの書式習慣に従って書くことができる <B2.2> | | |
| | | 相手の反応や意見、推論に対応することができる | [自分が述べたいことを]はっきりと正確に表現できる | 慣用の表現・口語的表現をかなり使いこなすことができる |
| やりとり | 長い会話に参加できる | らくらくと流暢に、自然に | 母語話者と比べても引けをたらず会話に参加できる | |
| | 関連説明、論拠、コメントを述べ、自分の意見を説明したり、維持したりできる <B2.1> | 感情を交えて効果的に言葉を使う | 適切に自由に会話ができる | |
| | 正確に自分の考えや意見を表現できる <B2.1> | 間接的な表現を使って | 的確に、細かいニュアンスを伝えることができる | |
| | 自分の意見や考えを正確に表現できる <B2.2> | | | |
| | 説得力のある言葉遣いができる <B2.2> | | | |

4.2.2 要素別分析

次に、A1からC2の全レベルに渡ってどのような変化が見られるか、4要素別(〔条件〕〔場面・話題〕〔対象〕〔行動])にまとめる。この詳細な分析では9レベル間の差異を明確にすることが困難であったため、6レベルの分析結果を述べる。

4.2.2.1 〔条件〕の分析

A1では、「非常にゆっくりと」「直接自分に向けられた」話ならば理解でき、A2で「発話のはっきりとゆっくりとしていたら」、「はっきりと標準的なものであれば」、B1で「標準的なことばで(慣用的な言葉遣いを避け)、発音もはっきりしていれば」と相手の話し方に関する制約条件が多く挙げられている。B2になると条件として「話の方向性が明示的に示されれば」という相手の発話や文字テキストに関することに加え、「難しい箇所を読み直すことができれば」と状況に対処するため自らの関わり方を変える行為がある。一方、「聴衆にも自分にも負担をかけることなく」産出できるようになる。そして、C1では「非標準的な表現があっても(～できる)」、「助け舟を出さなくても(～できる)」、C2では「母語話者にかなり速いスピードで話されても(～できる)」、「話題についても知識のない聴衆に対しても(～できる)」と周囲の制約があっても言語活動ができるようになる。

4.2.2.2 〔話題・場面〕の分析

A1では、「自分自身」や「簡単な日常の情報」、たとえば「身近な名前や単語」と身の周りの日常的なニーズの事柄に限られる。A2になると「身近な話題」「日常の簡単な話題」になり、さらには「習慣や日常の仕事に関して」「興味のある話題」に少し範囲が広がる。B1では、生活に関する幅広い分野、たとえば「家族、趣味、仕事、旅行、時事問題など」や「自分の専門分野」など範囲がさらに広がり、「非日常的な話題」や「抽象的、文化的な話題」も扱える。B2になると「自分の専門分野」に関して「技術的な話題」「多様な話題」にも対応でき、「個人間、社会、学問、職業の世界で通常出会う話題」、「自分の専門外」へと広範囲になる。C1では「専門外の抽象的で複雑な話題」も扱えるようになり、C2では話題がさらに複雑化する。

4.2.2.3 〔対象〕の分析

A1では「身近な名前、単語や基本的な表現」、「短い簡単な」ものと単語や語句レベルであるが、A2では「簡潔なテキスト(手紙、パンフレット、新聞の短い事件記事など)」、「短い、練習済みのプレゼンテーション」など、文レベルになる。B1になると、日常的な「短いテキスト(物語、記事、スピーチ、討議、インタビュー、ドキュメンタリー)」、「簡単な接続

詞でつなげた結束性のあるテキスト」など、ひとつまたはいくつかの段落レベルに対応することができる。B2では、「内容的にも言語的にもかなり複雑な講義、話」を理解し、「明瞭かつ詳細な記述文」や「体系的に展開したプレゼンテーション」などを産出することができる。C1では、「幅広い慣用表現や口語体表現のテキスト」を理解でき、「的確な構成や展開を持つ」テキストを書くことができ、C2になると「抽象的で構造的に複雑なテキスト」、また「かなり程度の高い口語表現や方言的な慣用表現」に対応でき、「流れのよい」スピーチができる。

4.2.2.4 [行動] の分析

[行動] の分析では、各レベルで「どのように」「どの程度」の言語活動を遂行できるのかに注目して特徴を述べる。A1では「簡単なやりとり」、A2になると「具体的なニーズを満たすことが可能な程度に理解」し、「簡単な句や文を連ねて述べ」たり、「非常に短い社交的なやりとり」などができる。B1では「議論の大筋を理解」することができ、「自分の信念、意見、賛成、反対を表現」することができる。B2では、「内容や重要度をすぐに把握」したり、「長い会話に参加」し、「相手の反応や意見、推論に対応」し、「正確に自分の意見や考えを表現」できる。さらに、C1では、「中身を詳細に容易に理解」し、自分が述べたいことを「らくらくと流暢に自然に」表現することができる。C2になると、「批判的に解釈」することもできるようになり、「聴衆の必要性に合わせて柔軟に話を構造化」し、「母語話者と比べても引けを取らずに会話に参加」できるようになる。

5. まとめと考察

5.1 まとめ

North (2000) や Council of Europe (2008) で指摘されるとおり、CEFR Can-do は言語能力の熟達度のすべてを記述したものではないことが前提となっており、筆者らもまた CEFR Can-do を「完璧な完成物」と捉えていないことはここで断っておきたい。しかしながら、ひとつの目安として、本研究では CEFR Can-do の記述を複数の切り口から詳細に分析することで、レベルごとの特徴を見出した。

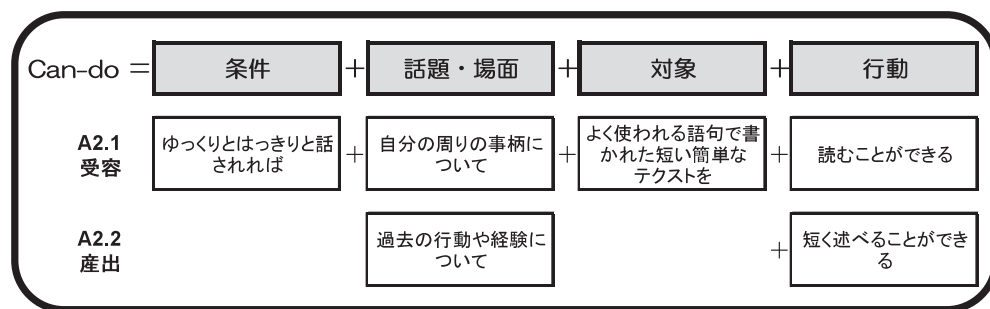
前節では表5「Can-do のレベル別特徴一覧」をわかりやすく説明するために、レベル別、要素別に分析結果を述べた。まず、4.2.1「レベル別の大まかな特徴」では、各レベル（9レベル）で見られる言語能力の熟達度を概観し、レベルが上がるにつれて言語活動がより複雑に、豊かになることがわかった。次に、4.2.2では Can-do を4つの要素〔条件〕〔話題・場面〕〔対象〕〔行動〕別に、レベルが上がるにつれてどのような変化があるのか、レベル間の差異は何かを明らかにした。まず、〔条件〕の分析結果からは、A1～B1では相手の話し方や周囲の環境が言語活動を制約するのに対し、B2になると、「読み返すことができれば」など自分の

関わり方次第で課題を遂行でき、C1、C2では「助け舟を出さなくても(～できる)」など制約に対処できるようになる。次に、〔話題・場面〕のA1からC2までの記述の変化を追うと、自分の周辺の事柄から専門外も含むものへと、言語使用の領域が私的領域から公的領域、職業領域⁷へと拡大し、話題の抽象度と複雑さが高まる。また、〔対象〕を見ると、短く簡単なものから長く複雑なものへと変化し、構造化されたテキスト、慣用表現などの高度な表現にも対応できるようになる。さらに、〔行動〕はレベルが上がるにつれて、言語活動が簡単なものから複雑なものになるだけでなく、表現できる内容が事実から感情や意見を含むようになり、表現の仕方の柔軟さや流暢さが増す。

5.2 考察

このように4要素の観点から各レベルのCan-doの特徴やレベル間の記述の差異が明示されることで、CEFR共通参照レベルを具体的にイメージでき、レベルイメージが共有しやすくなる。さらに、表5「Can-doのレベル別特徴一覧」のようにレベルごとの特徴を要素別、言語活動別に整理して提示することは、CEFRの共通参照レベルのイメージを概観するだけでなく、日本語教育現場の実践を踏まえてCan-doを作成するためにも有益といえよう。該当レベルの各要素に分類された「Can-do記述の特徴」を組み合わせることでCan-doを構築していくことで、CEFR共通参照レベルに関連づいたCan-doを作成することができると考えられるからである。図1は、本研究の分析結果にもとづいてCan-doの構造を単純化して示したモデルである。そしてその下には、このモデルに表5の各レベルの特徴を表した記述をあてはめ、Can-doを作成してみた例を示している。

図1 Can-doの構造モデル



<A2.1・受容>の例の場合は4要素すべて、<A2.2・産出>の例の場合は〔話題・場面〕と〔行動〕の特徴を組み合わせることで、Can-doを新しく作成することができた。このように、当該レベルの要素〔条件〕〔話題・場面〕〔対象〕〔行動〕の特徴を組み合わせることで、Can-do

をレベル別に作成する作業が容易になると予想される。

本研究では、CEFR 共通参照レベルの各レベルの特徴やレベル間の差異を明らかにしたことに加え、4要素を組み合わせた Can-do の構造モデルを提案することができた。これによって、レベルを特定する記述を要素ごとに組み合わせて Can-do を作成する方法が提示でき、本研究から Can-do 作成のためのガイドライン策定に役立つ知見を得ることができたといえる。

5.3 課題

一方で、本研究はいくつかの課題も残している。まず、9レベルの分析に関しては、CEFR Can-do そのものが9段階で記述されていない場合も多くあるため、厳密な検証は難しかった。たとえば B1 では、B1.1 と B1.2 にまたがる Can-do が多く存在し、B1.1 と B1.2 を明瞭に区別することができないからだ。各教育現場が評価活動に Can-do を利用する場合、9レベルの特徴をより精緻化した形でわかりやすく示していくことが必要であると考えられる。

また、今回の分析作業の限界として、レベル別キーワード選定の段階で、レベルごとに出現した語句のうち、全体の30%を占める語句を拾ったため、あるレベルのみに出現する語句であっても、その出現頻度が低い場合にはレベル別キーワードに選ぶことはしなかったということがあげられる。今後は、本研究の成果である表5「Can-do のレベル別特徴一覧」を精緻化する作業を進めると同時に、今回分析対象としなかった活動 Can-do 以外の CEFR Can-do についても別途分析を進めていく予定である。最終的には、JF Can-do を作成するためのガイドラインを提示したいと考えている。

6. 今後の展望

なお、本研究は Can-do を用いた日本語能力のフレームワーク構築に向けた第一歩に過ぎない。日本語能力のフレームワークの構築のためには、まずは本研究の成果を踏まえた JF Can-do の作成と検証に着手しなければならない。そして、「Can-do 記述の特徴」を具体化するためのサンプルなど、Can-do 以外のリソースの研究と充実が期待されるだろう。また、漢字や敬語に関する知識など日本語での言語活動を支える能力や知識が、CEFR 共通参照レベルや Can-do とどのように関係するか研究する必要もある。本研究はこのような大きな構想の出発点である。

〔主要参考文献〕

- 青木惣一 (2006) 「学習開始時と学習終了時の Can-do-statements 比較—プロフィシエンシー・テスト、オーラル・インタビューを外部基準として—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』、29号、18—43
- 大隅敦子・野口裕之・熊谷龍一・石毛順子・長沼君主・和田晃子・伊東祐郎 (2006) 「日本語能力試験 can-do statements (試行版) と CEFR-DIALANG との対応付けの試み」『5th International J-OPI-Symposium Berlin 2006』
- Council of Europe、吉島茂・大橋理枝他訳 (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第2刷、朝日出版社
- 国際交流基金 (2009) 『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社
- 塩澤真季・島田徳子・石司えり・小松知子・金孝卿・渡辺愛・西森年寿 (2009) 「Can-do を活用した日本語教育支援ツールの設計」日本教育工学会第25回全国大会予稿集原稿
- 島田めぐみ・青木惣一・浅見かおり・伊東祐郎・三枝令子・孫媛・野口裕之 (2003) 「日本語教育機関における Can-do-statements 調査の活用方法」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、119—124
- 島田めぐみ・谷部弘子・斉藤純男 (2007) 「日本語科目における言語行動目標の設定—Can-do-statements を利用して—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』、58号、495—505
- 長沼君主 (2005) 「到達度評価のための言語能力発達段階記述の枠組みの必要性」『AJALT』、28号、18—24
- (2008) 「Can-Do 尺度はいかに英語教育を変革しうるか：Can-Do 研究の方向性」『ARCLE REVIEW No. 2』、50—77、ARCLE <<http://www.arcle.jp/research/books/>>2009年9月26日参照
- 長沼君主・大隅敦子・和田晃子・伊東祐郎・熊谷龍一・野口裕之 (2007) 「JLPT 日本語能力記述分作成の試み：日本語能力試験 (JLPT) Can-Do Statements 試行版の分析から」『2007年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』、215—217
- 野口裕之・熊谷龍一・大隅敦子・石毛順子・長沼君主 (2006) 「日本語能力試験 can-do statements (試行版) の IRT 尺度化と日本語能力試験の得点段階との対応付けの試み」『5th International J-OPI-Symposium Berlin 2006』
- 野口裕之・熊谷龍一・脇田貴文・和田晃子 (2007) 「日本語 Can-do-statements における DIF 項目の検出」『日本語テスト学会研究紀要』、10号、106—118
- 藤井美和・小杉考司・李政元 (2005) 『福祉・心理・介護のテキストマイニング入門』中央法規出版
- Council of Europe. (2009) *Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR): A Manual*. Council of Europe Language Policy Division.
- Goullier, Francis. (2007) *Intergovernmental Policy Forum “The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and the development of Language Policies: Challenges and Responsibilities.” Report*. Council of Europe Language Policy Division.
- Lenz, Peter and Günter Schneider (2004) *A bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolios (2004)* Council of Europe.
- Little, David. (2006) The Common European Framework of Reference for Languages: Content, Purpose, Origin, Reception, and Impact. *Language Teaching*, 39 : 3, 167—190.
- North, Brian. (2000) *The Development of a Common Framework Scale of Language Proficiency*. New York: Peter Lang.
- (2002) Developing Descriptor Scales of Language Proficiency for the CEF Common Reference Levels. In

言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析

Alderson, J.Charles. (ed.), *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment : Case Studies*. 87-105. Strasbourg: Council of Europe.

—— (2007) *The CEFR Common Reference Levels: Validated Reference Points and Local Strategies. Intergovernmental Policy Forum “The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and the development of Language Policies: Challenges and Responsibilities.”* Council of Europe Language Policy Division.

[参考ホームページ]

財団法人日本英語検定協会『英検 Can-do リスト』 <<http://www.eiken.or.jp/about/cando/cando.html>>2009年9月28日参照

UniDic／茶まめインストール <<http://www.tokuteicorpus.jp/dist/index.php>>2009年8月1日参照

-
- ¹ 共通参照レベルを9レベルで表示する場合、A2、A2+と表示する場合 (North 2002) と、A2.1、A2.2と表示する場合 (Lenz and Schneider 2004) がある。
 - ² 日本語用の形態素分析ツールを使用したため、CEFR Can-do の日本語訳 (Council of Europe) を分析対象とした。
 - ³ 茶まめ解析結果の品詞は UniDic1.3.11バージョン準拠である。
 - ⁴ この作業に際しては、詳細レベルで実施すると2つのレベル (たとえば B1.2、B1.2) にまたがる語が多く頻出し重複するため、6レベルで解析することとした。
 - ⁵ 表3の「Can-do 記述の特徴の例」は、CEFR の吉島・大橋による日本語訳 (Council of Europe 2008) に掲載された CEFR Can-do から抜粋されたものである。
 - ⁶ 表5の記述は、CEFR の吉島・大橋による日本語訳 (Council of Europe 2008) に掲載された CEFR Can-do から抜粋されたものである。
 - ⁷ CEFR は言語使用が行われる領域として私的領域、公的領域、職業領域、教育領域の4つを挙げている (Council of Europe 2008 : 46)。

